【用語】すゝし―練らない生糸の織物、軽く薄くて紗に似る　あや―経糸に緯糸を斜めにかけて模様を織りだした絹　つむき―紬糸または玉糸で織った平織の丈夫な絹織物

【解説】桐生織物の源流は仁田山紬といわれている。「仁田山」は旧山田郡川内村（桐生市川内町五丁目）地域の大字名である。この地には中世に「仁田山城」が築かれて以後、古文書に「仁田山衆」の名もみえて、その地の絹織物に「仁田山紬」の名があらわれたようである。ところが、戦国末期の頃、突然に京都の町に出現し、足利将軍やその側近の人々に愛用されるに至ったといわれている。この説の根拠として引用されるのが、この小侍従書状である。

年次の記載はないが、天文十七年（一五四八）五月のものとされ、小侍従は十二代将軍足利義晴の侍女で、次の十三代将軍義輝にも仕えて奥向きの御用を果たしていた女性である。その後、永禄八年（一五六五）五月の松永久秀の反乱に際し、京都二条御所において将軍義輝及び侍臣三一人とともに暗殺された一人であった。宛名の彦部雅楽頭は十二代義晴と十三代義輝の将軍二代に仕えた家臣で、義晴からその名の一字「晴」をいただき晴直と名乗った人物であった。いずれにせよ、桐生の絹織物が商品として全国に流通し、その生産が本格的に展開するのは江戸時代に入ってからのことである。なお、この文書は桐生市指定の重要文化財である。